

# 第14章

## 関係詞

### 第1節 関係詞の概念と基本的な用法

#### 1. 関係詞とは

「**関係詞**」とは、英文の中の「ある名詞A」に対し、「**Aの追加情報を述べる節**」をAの後ろにつなげると同時に、自身が「**Aを言い換えた言葉**」となってその節の中で「主語」や「目的語」などとして機能する言葉のことです。（ちなみに、「節」とは、「主語(S) + 述語動詞(V)」の形を含んでいるかたまりですが、「文」ではなく、「文の一部」として機能している部分のことです。）

(★「節」→P.15 参照。)

「関係詞」が作り出す「名詞の追加情報を述べる節」のことを「**関係節**」と言います。また、関係節によって「追加情報を述べられる名詞」のことを「**先行詞**」と言います。

例：He wrote a book for **people who cannot sing well**.

「彼は**上手に歌うことができない人々**のために本を書いた。」

この文の途中にある「who」は「**関係詞**」です。そして、「who」は、前に置かれている名詞「people (人々)」を「**言い換えた言葉** (ここでは代名詞)」として機能しています。同時に、「who」そのものが「主語」となり、後ろに「cannot sing (歌うことができない)」という「述部 (述語動詞)」を伴って「who cannot sing well」という「**関係節**」を作り出しています。そして、この関係節によって追加情報を述べられている名詞は「people」となるので、「people」が「**先行詞**」である、ということになります。

このように、英文において、「前に出てきた名詞 (= 先行詞) を言い換えた言葉」となり、同時に「先行詞の追加情報を述べる節 (= 関係節)」を作り出し、さらにその節の中で「主語」や「目的語」などとして機能する言葉のことを「**関係詞**」と呼びます。

関係詞は「日本語」には存在しない概念ですので、日本語を母語とする人にとっては大変分かりづらいものだと言えますが、以下、少しずつ理解を進めていきましょう。

#### 2. 関係代名詞と関係副詞

「関係詞」には、「**関係代名詞**」と「**関係副詞**」の2種類があります。

「関係代名詞」は、「**who**」「**whose**」「**whom**」「**which**」「**that**」の5つです。また、「関係副詞」

は、「**when**」「**where**」「**why**」「**how**」の4つです。

<関係詞の一覧>

関係代名詞	関係副詞
who	when
whose	where
whom	why
which	how
that	

5つの「関係代名詞」のうち、「that」を除き、4つは「**疑問代名詞**」と同じ言葉です。そして「関係副詞」は4つとも「**疑問副詞**」と同じ言葉です。言葉は同じですが、「関係詞」と「疑問詞」では「文の中での働き」が異なりますので、注意しましょう。

<疑問詞の一覧>

疑問代名詞	疑問副詞
who (誰が)	when (いつ)
whose (誰の)	where (どこで)
whom (誰を/誰に)	why (なぜ)
which (どっち/どれ)	how (どうやって)
what (何)	

(★「疑問代名詞と疑問副詞」→P. 145 参照。)

### 3. 関係詞の「制限用法」(概要)

前述の通り、「関係詞」が作る「**関係節**」は、「先行詞の追加情報を述べる」という働きをします。この基本的な働きに加え、関係節が「**先行詞の意味の範囲を狭める**」という働きをする場合があります(しない場合もあります)。例えば、前述の「He wrote a book for people **who cannot sing well.**」という文であれば、「who cannot sing well (上手に歌うことができない)」という関係節が、「people (人々)」の範囲を狭めていると言えます。「世界の全ての人々」を、「上手に歌うことができる人々」と「上手に歌うことができない人々」の2つのグループに分け、そのうちの前者のグループを除外し、後者のグループに範囲を絞り込んで述べている、ということになります。

このように、関係節が「先行詞の意味の範囲を狭める」という働きをする場合の関係詞の用法を「**制限用法**」と呼びます。逆に、そのような働きをしない場合の関係詞の用法を「**非制限用法**」と呼びます。そして、関係詞が「制限用法」として使われている場合は、関係詞そのものは**日本語には訳されません**。

「関係詞」が「制限用法」として使われている場合、関係詞によって作り出される「関係節」は、「**形容詞節**」として機能し、直前の「名詞(=先行詞)」を修飾している、と解釈することもできます。つまり、制限用法の関係詞は「形容詞節を導く」ということです。

英語初学者は、まずは「制限用法」の例のみを使って学習していくと良いでしょう。

(★「形容詞節」→P. 17 参照。)

(★「関係代名詞の『制限用法』と『非制限用法』」→P. 363 参照。)

以下、関係詞が「制限用法」として使われている例文です。英文と和文の両方を見比べながら、「関係節（波線の部分）が先行詞の意味の範囲を狭めている」という点、および「関係詞そのものは日本語には訳されていない」という点を確認しましょう。

例1：The **boy who helped us yesterday** is Jane's brother.

「昨日私達を助けてくれた少年はジェーンの弟です。」

例2：They are looking for an **actor whose eyes are blue**.

「彼らは瞳が青い役者を探している。」

例3：Is she really the **dancer whom we saw at that party**?

「彼女は本当に私達があのパーティーで見たダンサーですか？」

例4：You should use a **dictionary which has over 200 thousand words**.

「君は20万を超える単語を持っている辞書を使うべきだ。」

例5：This coffee is the only **thing that is left for me**.

「このコーヒーが私のために残されている唯一の物です。」

例6：This is the only **moment when I can relax**.

「これが私がくつろぐことができる唯一の瞬間です。」

例7：This is the **room where we eat**.

「これは私達が食事をする部屋です。」

例8：Please write the **reason why you were late for school this morning**.

「あなたが今朝学校に遅れた理由を書いてください。」

例9：Do you remember the **way how they built that bridge**?

「君は彼らがあの橋を建造した方法を覚えていますか？」

(※実際には、例3の「whom」、例6の「when」、例7の「where」、例8の「why」、例9の「how」は省略され、文中で表記されないことが多い。)

(★「関係代名詞の省略」→P. 354 参照。)

#### 4. 「先行詞」と「関係節」の位置に関する英語と日本語の違い

上記の例1～例9において、「関係節(=追加情報を述べている節)」と「先行詞(=追加情報を述べられている名詞)」の位置を見てみると、両者の順番が「英語」と「日本語」とで「逆」になっていることに気がつきます。英語では、「追加情報を述べられている名詞」が「前」に置かれていますが、日本語では逆に「後ろ」に置かれています。この順序の逆転現象は、「関係詞の制限用法」では必ず生じます。このため、関係詞が制限用法として使われている英文を日本語に訳す際(あるいは、逆にそのような表現が含まれた日本語の文を英文に訳す際)には、「追加情報を述べている節」と「追加情報を述べられている名詞」の順番を必ず「逆」にしなくてはなりません。